山口薫先生から きみたちへ

時をこえて

《沼のある牧場》1964年（アーツ前橋蔵）

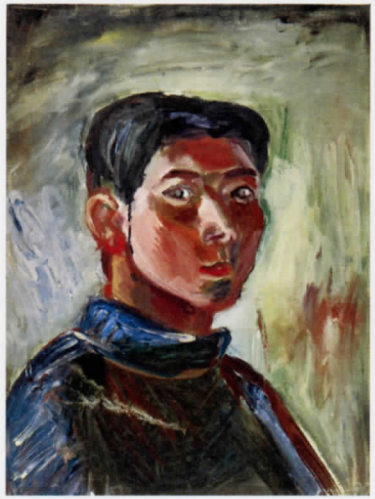
ごあいさつ

「まるで、独り言を手がいう様に」描く群馬県高崎市出身の山口薫（1907-1968）は、東京美術学校（現・東京藝術大学）卒業後の滞欧をへて、新時代洋画展、自由美術家協会、モダンアート協会を結成し、1930年代から60年代の世界をみつめる一方、郷里の友とともに内なる心を歌い続け、また武蔵野美術学校（現・武蔵野美術大学）講師、母校である東京藝術大学教授などを務めました。没後50年を記念する本展は、群馬県立近代美術館をはじめとする県内所蔵作品を中心に山口薫の油彩、水彩、素描、リトグラフや作家資料を紹介するとともに、坂和一郎（1898-1980）、松本忠義（1909-2008）、豊田一男（1909-1989）など郷里の友や、富澤秀文（1940-）、竹内俊雄（1942-）、大津英敏（1943-）、井川惺亮（1944-）など学校の教え子たち、そして島村達彦（1922-2004）や有元利夫（1946-1985）など影響を受けた画家たちの作品も交え、画家のみならず「詩らしきものが先に生まれ／絵があとにつづくときもある」と語る詩人であり、良き教師でもあった山口薫の面影を偲びます。また未来の教え子である山口の母校児童や地元アーティストとともに、改めて「山口薫先生」の絵から学ぶ機会を設けます。最後に本展の開催にあたり、多大なご尽力を賜りました山口保輔様、石田絢子様、山口杉夫様、山口豊國様や、群馬県立近代美術館様はじめ、貴重な作品をご出品くださるなどご協力を賜りました皆様に、厚くお礼申し上げます。

2018年9月　主催者

第1章
郷里　1950年まで

思い出を書けば一冊の本になってしまうくらい、箕輪村（今の群馬県高崎市箕郷町）は、私にとって大切なふるさとです。初めまして、山口薫です。50年前、61歳を前に亡くなるまで1,500点くらい絵を描きました。111年前に生まれ、今の箕輪小学校、高崎高校、東京芸大を出てフランスに渡ります。《自画像》は芸大卒業のとき、自分を描きました。そっくり描くのがうまいとほめられていたけれど、この絵はそっくり描くことより心をこめて描こうと思いました。フランスでの2年半、先生なしにひとりで描くむずかしさを知りました。セザンヌという画家さんがよく描いた、ふるさとのサント・ヴィクトワール山をみて、妙義山を思い出した。こんなふうにふるさとの山が描きたい、セザンヌはそっくりに描くのでなく、その山に向かう気持ちとか思い出まで描こうとするから、空も広いし山も高いのだって。筆のあとに心をこめるって、知っていたつもりだったけれど、もういちどふるさとの山でためしてみたくなりました。帰ってから榛名山や赤城山を描いてみると、心をこめればこめるほど、絵に自然の空気や光がかようように感じました。あたらしい描き方にチャレンジするグループを作ったり、戦争があったりと落ちつかなかったけれど、心をこめて描くためには、生活を大切にすることだと気づいたのも、ふるさとのおかげです。



《自画像》1930年
（東京藝術大学蔵）

『出発ヨリ帰着点へ』より 1922年

《箕輪城跡》1936年

コラム1　郷里

「出発ヨリ帰着点へ」という絵日記が15歳の出発点でしたが、タイトルはそのまま、山口さんにとっての箕郷のことのようです。絵を始めた生まれ故郷ですし、いつでも帰ってくる心のふるさとでした。フランスから日本に帰って、東京の上北沢に箕郷の木材と大工さんをたのんでアトリエを建て、ずっと暮らしましたが、疲れたり、傷ついたり、困ったりするたび箕郷に帰りました。11人兄弟の末っ子で家族から「カオちゃん」と可愛がられ、仲間からも「カオルさん」と親しまれました。最初の結婚につまずいて筆も握れなくなったとき、空襲が激しくなり東京で暮らせなくなったとき、絵を売って生活しなければならないとき、帰ればあたたかく迎えてくれ元気をくれたふるさと。そして生活から、心から描きたい山口さんにとって、ふるさとは大切な絵のテーマでした。《箕輪城跡》はいちど筆を握れなくなった29歳のとき、家族や仲間たちにそっとみまもられてふたたび描きはじめた絵です。テーマや色やかたちなど、のちの絵の大切なヒントは、すべて箕郷にありました。探しにいらしてみてはいかがでしょうか？（S）

コラム2　デッサン

デッサンは「素描（そびょう）」という意味のフランス語です。下描きでまちがいないのですが、画家にとってもっと大切な役目があるようです。フランス時代前後、20代前半のデッサンが上手にみえないとしたら、それは山口さんがもう上手に描こうとしていないから。同じ頃描いたデッサンと油絵をくらべると、線で描くデッサンと、色のかたちで描く油絵にみえます。でもデッサンからも色やかたちがみえるし、油絵にもハッとするような美しい線がみえますね。油絵は日本人である山口さんには外国の絵具、描き方ですから、鉛筆の線で描くデッサンと、油絵のあいだを行ったり来たりしながら、油絵とのつきあい方を少しずつ学んだのだと思います。《緑衣横臥婦人像（りょくいおうがふじんぞう）》の背中を包む線は、まるで光っているようにみえます。女性のからだとまわりの空気の境目を、光でふちどっているのですね。女性のからだを切り取る線というより、からだと空気がふれあうように感じられます。そして光を色で描くのは油絵ならでは。この光は、上手に写すだけではみえてこない心の中の線。それを最初に探すのがデッサンの役目です。（S）

《無題（裸婦（うつぶせ））》1930-33年頃
（高崎市美術館蔵）

《緑衣横臥婦人像》1931年頃
（群馬県立近代美術館蔵）

《赤城の裾野（すその）》1935年
（群馬県立近代美術館蔵）

《地の星「娘と花」》1937-47年頃
（群馬県立近代美術館蔵）

《水》1941年
（群馬県立近代美術館蔵）

コラム3　抽象（ちゅうしょう）

何かを上手に写すのではなく、筆のあとに心をこめて、線や色、かたちをつかんで描く。すると絵はもう目の前のものごとではなく、山口さんの心の世界になります。そこに私たちの心の世界をかさねることができたら、絵空事（えそらごと）ではなく、本当の心のできごとになります。絵には絵の中だけの線があり、色があり、かたちがある。そう気づくことのできる人が画家です。そんな線や色やかたちを、むずかしいことばで「抽象（ちゅうしょう）」といいますが、山口さんは「夢」や「情感（じょうかん）」といいました。ただの色やかたちの組み合わせの先にある心の世界へ。そのはじめの一歩が山口さんにとって、まさに線なのでした。《赤城の裾野（すその）》の手前の線は、光と影の境目ですが、ただの光と影ではなく、もう心の目でみている線。2年後の《地の星「娘と花」》では、娘のみる夢なのか、花のみせる夢なのか、どこか遠い世界。《クリスタル壺》ではとなりあう光と影がとけあって、描いていないはずの線があらわれる。絵のまわりをつつむ光も、じつはいろいろな色と、となりあう塗りのこしの白。描かずにあらわれる光や線だから、夢なのです。（S）

《クリスタル壺》1948年
（群馬県立近代美術館蔵）

コラム4　静物（せいぶつ）

かたちと空気のふれあう線といいましたが、絵の中でその空気は、背景です。かたちをかこむ線ではなく、かたちと背景がふれあう境目なのですね。そう気づくと、かたちだけでなく背景が気になります。花や果物（くだもの）、テーブルなど動かない静物（せいぶつ）はよくあるモデルですが、山口さんはとくに41歳から42歳の1年間、柿や桃、りんごをたくさん描きました。でも《港》では桃だけでなく、海や船や岬のようすが背景にみえます。港にテーブルをおいて桃を描いた？いいえ、桃を描くうち、思い出の港が背景にかさなったのです。静物なのに風景みたいですね。静物が心の風景に変わったのでしょう。外の世界から心の世界に目の向きが変わって、桃のかたちでなく、桃のまわりをみるようになったのです。この頃山口さんは、大好きな杉の木もたくさん描きました。むかし杉林をみあげて模様（もよう）みたいだと思ったときも、杉の木にふちどられた空をみていたのですね。まっすぐな線を描くのに、杉の木はいちばんよいモデルだったのでしょう。杉と空のふれあう線。それは外の世界と心の世界がふれあう線でもあります。（S）

《港》1949年

《観音の立つ山》1959年
（高崎市美術館蔵）

《ノートルダァム》1954年
（群馬県立近代美術館蔵）

第2章
家族　1959年まで

若いころからとても好きな色があって、もうお気づきかもしれませんが朱色と緑色です。箕郷の土の色だし杉林の色なので、やっぱりふるさとの色。とくに朱色なしでは絵が仕上がらないほどでした。けれど杉を描くうち黒い線がふえた。木を燃やした木炭でキャンバスに黒い線を引いて、その上から油絵具で描くとき、黒い線が塗りつぶせなくなって。たくさんの線から一本を選ぶむずかしさ、仕上げた絵が次の日気に入らないこと……。だからきっと、描いた時間をそのままみえるようにのこしたかったのかもしれません。強い絵明るい絵がはやると、かえって色をころしたくなる。墨を使って、墨のように油絵具を塗って、黒い絵になる。もうひとつ、芸大の学生たちを奈良や京都に連れていく先生になって、前から好きなむかしの仏像（ぶつぞう）も、ふるさとだと感じた。私の絵もむかしのふるさとに帰れるよう、いのるような気持ちで。聖母マリアとイエスを描いた《ノートルダァム》は聖書の物語ですが、妻と息子の思い出でもあります。それにいつの、どの親子だってよい。父親になって、絵にこめたい気持ちや生活が、自然に妻や娘の姿になりました。でも1年に50枚も描かなくちゃならないと、家族とはなれてアトリエにひとり。絵とむきあうのは楽しいけれどさびしい。ついお酒に手がのびて。……そうか、心の世界をのぞきこむことは、時のながれをみつめることなのだ。私の時間はひとりの時間。そして遠い家族やふるさとの思い出。

コラム5　動物たち

山口さんの描く牛や馬などふるさと箕郷の動物たち。赤城の裾野のカラスもくりかえし描いたし、15歳の絵日記の牛の母子も40年ほど後《花子誕生》になります。牛に姿をかえたゼウスと乙女エウロペのギリシャ神話も、娘のあやこさんの絵に変わる。牛は山口さんなのでしょうか？茶碗のヒビ、お風呂場、トイレの窓にまで牛のまぼろしをみた山口さん。窓にうつった自画像？「私は牛を飼ったことがない」「そばでみているだけであった」けれど「私にはどう描いても牛の顔にならないと気がすまない」心の自画像だったのです。東京、上北沢の家でもたくさんの猫や犬や鳥たちの世話をしました。いちばんのお気に入りは山口家みんなの愛犬、甲斐虎(かいとら)犬のクマ。ひとりアトリエですごすとき、庭のクマにそっと語りかけます。「おぼえておいてくれクマ」……。水彩の《竹林とクマと娘》では細くも太くもできる墨が線にも色にもなって、自分だけの油絵に気づくヒントになりました。それほど大切なモデルだったクマ。山口さんが亡くなった年の大晦日(おおみそか)、クマも息をひきとります。山口さんの後を追って、きっと《若い月の踊り》の馬たちのもとへ。(S)

《竹林とクマと娘》1962年
(柳澤佳雄氏蔵)

《若い月の踊り》1968年
(群馬県立近代美術館蔵)

《庭》制作年不詳

《ある都》1963年
(群馬県立近代美術館蔵)

《紙箱と真田紐》1960年
((公財)大川美術館蔵)

第3章
歴史　1968年まで

美へのめざめはいつだったのでしょうか。15歳の絵日記に「出発ヨリ帰着点へ」と書きましたが、その出発をせめて子どもたちに伝えたい。むかしの仏像や焼けてしまったお寺の絵や柱にも、ふるさとを感じた心。私の心は、むかしの絵を、人を思い出すことができます。夢みるのと同じように、心の中にたしかに生きている。これが永遠？きみの夢、私の夢、ひとりひとりの夢をつないで、永遠の人の姿に。そんな絵を描きたかったのです。絵というものに夢をよせる、ものおもい。私がくりかえし描く菱形(ひしがた)や水のほとり。はじめ菱形の《水》を描いたきっかけは、かたちと色でした。好きな朱色で水のほとりの赤土を描きたかったから。それからその菱形は田んぼになり、ままごとあそびの箱庭の農園になり、やがて大きな沼になり、ほとりにはいつのまにか馬たちも群れて。かたちのおもしろさから思い出をたどって、ここまできました。そう、庭のかしぐね*も竹林もままごとだけど小さな箕郷でした。それから近所で芹をつむよい香りも。これが私の歴史……。そういえば菱形はうちの家紋です。するとスタートもゴールも箕郷なのか、どんなに大きな世界を心に思い描いても。この頃よく涙(なみだ)と書いてしまう。思い出をたどることは、永遠につながること。かなしみのなみだでなく、ありがとうのなみだならよい。私の誕生日、8月13日のお盆の入りみたいに、どこか遠くからみまもってくれる人たちと、今ここにいる私と。輪になってありがとうと。

＊かしぐね…樫でつくる風よけの垣根のこと。

第4章
山口薫先生からきみたちへ

ふるさとの仲間たち、教え子、私をしたってくれた人たちを紹介します。坂和一郎さんは、箕郷でお百姓をしながら絵を描いた大先輩です。松本忠義くん、豊田一男くんは今の高崎高校の2年後輩。松本くん豊田くんとは、学生時代に高崎で展覧会をひらいたし、松本くんの《はだか》と私の《油彩スケッチ》は、同じモデルを描く勉強会のもの。描けなくなり箕郷に帰ったとき、坂和さんと松本くんのアトリエ「赤土山房」にかよううち、また落ち着いて絵をはじめることができた。富澤秀文くん、竹内俊雄くんは同じ群馬生まれで芸大の教え子。大津英敏くんは大学院研究室の、井川惺亮くんは大学教室の最後の教え子です。みんなの思い出には、「誰にも教わらないよさがある」とか、「やるときはやらなきゃいけないよ」とか、生きているということを伝えたことばがのこっているようでうれしい。私もきみたちの絵をみて気持ちを休めたのですよ。みんなでお酒を飲んだり旅したのも楽しかった。島村達彦くんは、親しくお世話になった評論家の今泉篤男(1902-1984)さんから、みどころがあるからとたのまれた。今泉さんから島村くんはどう?と聞かれ、白の使い方がうまいから大丈夫とこたえました。有元利夫くんは私の亡くなった後の芸大の学生だけど、私の絵や詩が好きだと、画家仲間にずいぶん話していたみたいだね。私と同じでつらくなるとついお酒に手がのびて、夜の長電話になったようです。

松本忠義《はだか》1935年
(高崎市美術館蔵)

山口薫《油彩スケッチ》1935年

富澤秀文《像》1964年

竹内俊雄《裸婦習作》1965年
(東京藝術大学山口教室課題制作)

大津英敏《江の島》1990年

島村達彦《白(早春)》1980年代
(島村春江氏蔵)

井川惺亮
《自画像(卒業制作)》1968年
(作家蔵)

有元利夫
《私にとってのピエロ・デラ・フランチェスカ》より 1973年
(東京藝術大学蔵)

山口薫略年譜

1907（明治40）年		8月13日、現・高崎市箕郷町に生まれる。
1925（大正14）年	18歳	群馬県立高崎中学校（現・高崎高等学校）を卒業。2年後輩に松本忠義、豊田一男がいた。
		東京美術学校（現・東京藝術大学美術学部）西洋画科に入学する。
1926（大正15）年	19歳	第7回帝展に初入選、翌年も入選。以後一九三〇年協会展、国画会展、二科展にも入選する。
（昭和元年）		
1929（昭和 4）年	22歳	群馬県内洋画家による白樹社を創立する。また松本、豊田に呼びかけ赤羊社洋画展を開催する。
1930（昭和 5）年	23歳	東京美術学校西洋画科を卒業し、横浜港より渡仏する。
1932（昭和 7）年	25歳	セザンヌのアトリエとサント・ヴィクトワール山を訪れ、光や空気をとおして風景をみるきっかけになる。
1933（昭和 8）年	26歳	神戸港に帰国し、長兄が用意してくれた世田谷区上北沢のアトリエに入る。
1934（昭和 9）年	27歳	村井正誠、矢橋六郎らと新時代洋画展を結成する。
1936（昭和11）年	29歳	最初の結婚が破たんする。神経衰弱から郷里で静養し、坂和一郎、松本と屋外制作に励む。
		ドイツ・ロマン派の詩人ノヴァーリスに惹かれ、抒情をテーマに描きはじめる。
		のちに「単なる写実の無意味ということにおもいいたりました。」と回想する。
1937（昭和12）年	30歳	新時代洋画展の主な同人とともに自由美術家協会を結成する。
1938（昭和13）年	31歳	生活が制作になくてはならないと記す。翌年、越前谷マサと結婚する。飲酒の習慣が始まる。
1945（昭和20）年	38歳	郷里に疎開する。
1946（昭和21）年	39歳	高崎工業高校（現・群馬県立高崎工業高等学校）非常勤講師を務める。
		自由美術家協会再建を協議するためメンバーが山口を訪れ、基本方針が決定される。東京に戻る。
1948（昭和23）年	41歳	翌年にかけて心象風景としての果物連作をきっかけに、内面をみつめる目が深まる。
1950（昭和25）年	43歳	自由美術家協会を脱退し、モダンアート協会を結成する。
1951（昭和26）年	44歳	武蔵野美術学校（現・武蔵野美術大学）講師となる。土器には気持ちをみたすものがあると記す。
1953（昭和28）年	46歳	東京藝術大学講師となる。
		第2回サンパウロ・ビエンナーレに出品する。
1954（昭和29）年	47歳	この頃白と黒が画面を占めるようになる。
1955（昭和30）年	48歳	高崎市役所玄関ロビー壁画《朝・昼・晩》が完成する。
		美術評論家・今泉篤男の紹介で、島村達彦が山口薫に師事する。
		東京藝術大学古美術研究旅行引率で奈良、京都を訪れ「美術についての自分のふるさと」を見出す。
1957（昭和32）年	50歳	画商が選ぶベストテン1位となり、多忙による疲労感から酒量が増える。
1958（昭和33）年	51歳	第2回グッゲンハイム賞国際美術展で日本国内賞を受賞する。
1959（昭和34）年	52歳	第10回毎日美術賞を受賞する。東京藝術大学助教授となる。
1960（昭和35）年	53歳	昭和34年度芸術選奨文部大臣賞が贈られる。第30回ヴェネツィア・ビエンナーレに出品する。
		この頃より庭やそれを広げた沼と馬、牛の顔、飼い猫や飼い犬クマ、娘を連作するようになる。
1964（昭和39）年	57歳	東京藝術大学教授となる。
1966（昭和41）年	59歳	富澤秀文が東京藝術大学大学院山口薫研究室を修了する。
		竹内俊雄が東京藝術大学山口薫教室を卒業する。
1967（昭和42）年	60歳	胃がんのため入院する。以後入退院を繰り返す。
		翌年にかけ日月を背に並ぶ馬と鎧を連作する。この頃、来世は過去にある先人の住むあの世と記し、
		おがみたい時にその場所はどこにもある　いつでもと記す。
1968（昭和43）年		5月19日、東京女子医科大学病院にて逝去。従四位勲四等旭日小綬章が追贈される。
1969（昭和44）年		大津英敏が東京藝術大学大学院山口薫研究室（山口の指導は1967年まで）を修了する。
		有元利夫が東京藝術大学美術学部に入学し1973年卒業する。
		没後のため直接の師ではないが、有元は後年、山口への思慕をしばしば作家仲間と語り合っている。
1970（昭和45）年		井川惺亮が東京藝術大学大学院（山口の指導は学部時代）を修了する。

＊作成にあたり『山口薫展』（群馬県立近代美術館、世田谷美術館、三重県立美術館・2008年発行）、『山口薫–色と形に託した魂の日記–』（黒田亮子著、みやま文庫・2009年発行）、『山口薫全作品集』（東京美術倶楽部・2011年発行）を参考にしました。記して謝意を表します。

《沼のある牧場》1964年（アーツ前橋蔵）

没後50年　山口薫先生からきみたちへ
2018年9月23日（日・祝）～12月2日（日）
主催・会場　高崎市美術館

謝辞：この展覧会のために貴重な作品や資料を貸与され、また、ご協力いただきました山口杉夫様、群馬県立近代美術館様はじめ、下記の皆様や、お名前を記すことのできなかった皆様に深く感謝の意を表します。

山口保輔　石田絢子　山口杉夫　山口豊國

アーツ前橋　株式会社東京美術倶楽部
群馬県立近代美術館　（公財）大川美術館
東京藝術大学大学美術館
淺木正勝　有元容子　井川惺亮　泉澤守　今井善之輔
加藤寿一　金澤初夫　ギャラリーあーとかん　黒田亮子
馬場律夫　島村春江　竹内俊雄　田中富士子　田中是宇
T house Project　戸塚英敏　富澤秀文　前島芳隆
丸栄堂　柳澤佳雄　（敬称略）

編集・発行：高崎市美術館　住田常生
〒370-0849群馬県高崎市八島町110-27　Tel.027-324-6125
http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2014011000353/
制作：株式会社原人社

高崎市美術館
TAKASAKI MUSEUM OF ART